

P-1

高度経済成長期の全国レクリエーション大会
—高度経済成長の始まりから東京オリンピック開催年まで—
○加藤秀治・澤村博[日本大学]

キーワード：東京オリンピック、全国レクリエーション大会、高度経済成長

本発表では高度経済成長期における全国レクリエーション大会の取組みを考察し、当時の概要を明らかにすることを目的とする。

研究方法については全国レクリエーション大会のプログラムや報告書などの史料を参考にする。

この時期の日本の経済は 1955 年の神武景気を皮切りに経済的かつ飛躍的に発展した。そういった社会情勢の中でレクリエーションへの認識や取組みも変化した。

実施種目は日本の独自性をより重視した内容に変化していき、討議内容に関してもそれまでの大会から変化し社会的なテーマが取り上げられるようになった。

一般的に日本の高度経済成長期は 1955 年から 1973 年とされているが、本発表では東京オリンピックの開催された 1964 年を一つの区切りとして考察する。

P-2

生活者論からみた現代レジャー

○須賀由紀子 [実践女子大学]

キーワード：生活者 レジャー 暮らし

「生活者」は、他国の言語に置き換えることが難しい言葉で、日本人の暮らしの中で生み出されてきたものである。自らの「あたりまえの」「日常の生活」に主体的に自律的に働きかけをし、それを「よいもの」に変えていこうとする意志をもった市井の人々のありようを意味する。1980 年代頃からよく使われるようになったが、その概念は、半世紀以上前に辿ることができ、戦後の社会変動のプロセスの中で、この言葉に包含される意味内容や向かう対象を多様化させながら、今日に至っている。そして、東日本大震災を経てあらためて「生活」の大切さに人々が思いを新たにした今、再び、「生活者」という言葉の重みが増しているのである。この「生活者」に、今、どのような意味内容が込められているのかを検討することは、これからの時代に求められる暮らしのかたちと向かうべき社会の方向性を示すと考えられる。本研究は、この生活者論の系譜とレジャーを関連づけて捉え、人々が求めた「よりよい暮らしのかたち」とレジャーがどのように関わり合って今日に至り、これからの暮らしと社会のありようとの関わりで現代のレジャーはどのように捉えられるかを検討し、レジャーの社会的・今日的意義を考察しようというものである。